子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2013年1月　NO.171

[もくじ]

2～3　名字のルーツを求めて…森岡浩
4～5　スタンフォード大学と私…浜田貞雄
6～7　全国源流サミット開催報告…野瀬覚謹
8～9　第十二回「詩のボクシング」全国大会を終えて みらいホールからのぞむ「声の場」…高瀬草ノ介
10～11　言葉の現場から37国語の授業は難しい！…広井護
12～13　高知市文化振興事業団10月～12月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「春の七草粥」黒岩亜美

公益財団法人高知市文化振興事業団

名字のルーツを求めて

森岡　浩

日本人の名字を本格的に調べ始めてはや三十年。現在では名字を専門にしている人は他におらず、マスコミからの取材を受けることも多い。その際にしばしば聞かれるのが、「なぜ名字の研究を始めたのか？」ということだ。

私が名字に興味を持ったのは、やはり高知県出身であること、とくに郊外の新興住宅地に育ったことが大きい。小学校の頃はいろいろな名字の人がいて、とくに気にすることもなかったが、土佐中学校に進学すると、今まで見たことも聞いたこともないような名字の人がたくさんおり、なかには、どう読めばいいのかわからない名字もあった。驚いたのは、授業中にある年配の先生が、「お前は○○という名字だから△△村の出身か？」と聞くと、言われた生徒が「はい」と答えたことだ。

新興住宅地は基本的によそ者の集まりである。公務員宿舎などもあり、毎年多くの転校生がやってきては去っていくという環境では、名字から出身地がわかるというのは考えたことがなかった。

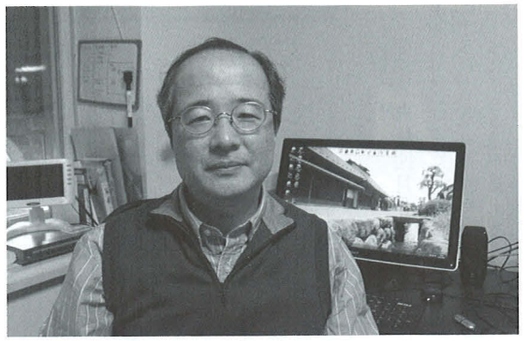
家に帰ると、当時は全県で一冊だった電話帳を引き出し、先生の言った村を見ると、確かに市内ではあまり聞かないその名字がずらっと並んでいる。先生は名字の研究家でもなんでもなく、単に教師としての長年の経験から身につけていたのだろうが、「名字で出身地がわかる」というのは衝撃だった。

小学校時代からものを調べることに興味があった私は、早速電話帳をひっくり返して、各市町村に独特の名字があるかどうか調べてみた。すると、あるわあるわ、東洋町の蛭子、北川村の浜渦、香我美町の百田、物部村の宗石、夜須町の清藤、佐川町の横畠、吾北村の筒井、越知町・吾川村の片岡、土佐市の石元、日高村の戸梶、須崎市の笹岡、梼原町の中越など、あげればきりがない。さらにこれらは市町村単位というより、多くは大字単位で名字が集中していることもわかった。

そして中二くらいの頃に『高知県の歴史』（山川出版社）を読んでいると、室町時代に、越知町に片岡氏がいたとあるのを見つけた。ということは、越知や吾川に片岡さんが多いのは偶然でもなんでもなく、歴史的な裏打ちがあるのではないか、と思い始めた。ならば、各地に伝わる系図を集大成すれば、日本人の名字のルーツを解明できるのではないかと考え、歴史の本や事典をあたっては系図を書きうつす日々が続いた。

高校時代は図書館にある基礎資料をみる程度だったが、大学に入るとさすがに資料が揃っている。授業などそっちのけで図書館に居座り、来る日も来る日も資料を出しては系図を集め、その発祥地となった地名を調べることを続けた。

二千家ほどの系図が集まったとき、そろそろまとめようとして五十音順に整理したところ、基本的な問題に気がついた。それは、「実際にはみたことがないような名字の系図がたくさんある一方、ごく普通の名字なのに系図がないものがたくさんある」ということだ。高知県でも、長宗我部や香宗我部、安芸といった名族の名字は数が少ない。つまり、系図が伝わっている家というのはごく一部にすぎず、それらをいくら収集したところで、「日本人の名字」という全体像をみることができないということである。要するに、本当に日本人の名字の全貌を知るためには、こうした資料には現れない事情を探る必要があるのだ。



筆　者

たとえば、猫は現代ではごく普通にいるが、猫のつく名字は極めて少ない。これは、古代や中世において猫はほとんど飼われていなかったことが理由だ。それに対して、古代から飼育されていた犬のつく名字は多い。鳥でも、今はどこにでもいる鳩のつく名字よりも、古代から飼育されていた鵜のつく名字の方がはるかに多いのだ。こうしたことは系図の収集では決して得ることのできないものである。ただ集めるだけで成り立つ学問などあるはずがない。資料は資料として、それとは別に「なぜ？」を考えることで、物事の本質により深く迫ることができる。

また、色の名字では「青」「赤」「白」「黒」の四つが圧倒的に多く、「茶」「黄」「紫」「緑」などは極端に少ない。これも、日本では古くは色の種類は四つしかなかったという説と合致する。「青山」さんのルーツである「青山」の「青」とは緑色のことで、当時は「青」に含まれていたのだ。

つまり、名字の研究とは、ただ資料を追いかけるのでなく、地名や民俗といったものから動植物の分布まで含めて、日本人の生活にかかわるあらゆることを総合的に考察してこそ、初めて見えてくるのだ。逆にいえば、日本人の名字には、そうした日本人の生活そのものが凝縮されているといえる。

日本人の名字の数ははっきりしていない。しかし、十万種以上あるのは確実で、これらのすべてを一つずつ一人で解明するのは現実的ではない。もっと大きく、名字の全体像から、われわれ日本人の生活の歴史をどこまで探ることができるか、を日々考えている。

高知県名字ランキングベスト50

1	山本	やまもと	26	中山	なかやま
2	山崎	やまさき	27	森本	もりもと
3	小松	こまつ	28	横山	よこやま
4	浜田	はまだ	29	岡田	おかだ
5	高橋	たかはし	30	伊藤	いとう
6	井上	いのうえ	31	土居	どい
7	西村	にしむら	32	森	もり
8	岡林	おかばやし	33	野村	のむら
9	川村	かわむら	34	尾崎	おざき
10	山中	やまなか	35	竹内	たけうち
11	坂本	さかもと	36	安岡	やすおか
12	片岡	かたおか	37	松岡	まつおか
13	松本	まつもと	38	北村	きたむら
14	田中	たなか	39	渡辺	わたなべ
15	前田	まえだ	40	橋本	はしもと
16	和田	わだ	41	中平	なかひら
17	山下	やました	42	西岡	にしおか
18	田村	たむら	43	門田	かどた
19	岡本	おかもと	44	浜口	はまぐち
20	西森	にしもり	45	筒井	つつい
21	岡村	おかむら	46	宮崎	みやざき
22	中村	なかむら	47	小笠原	おがさわら
23	岡崎	おかざき	48	大崎	おおさき
24	森田	もりた	49	藤原	ふじわら
25	矢野	やの	50	竹村	たけむら

もりおか　ひろし
一九六一年　高知市生まれ
土佐中学・高等学校から早稲田大学政経学部を卒業。学生時代から独学で姓氏研究を始め、地名学、民俗学などさまざまな分野からの多角的なアプローチで追求し、文献だけにとらわれない実証的研究を続けている。著書に『なんでもわかる日本人の名字』（朝日新聞出版）『名字でわかる日本人の履歴書』（講談社）『全国名字大辞典』（東京堂出版）など多数。

スタンフォード大学と私

浜田　貞雄

一九六九年四月、私は日本体育大学卒業後すぐ渡米しました。最近みんなから〝決断が良く出来ましたね〟とか言われますが、何の不安も躊躇もなく、ただアメリカという国に対する好奇心に駆られての渡米でした。

あの頃の日本はアメリカから映画、音楽、車、ファッションなど様々な文化が入ってきており、日本の若者には憧れの国でした。今はどこのスポーツ店でも売っているテーピング用のテープも、大学時代に日体大に来ていたアメリカの体操選手が使っているのを初めて見ました。実に便利な物で、私は穴の開いた体操用シューズの修理のために少しもらった記憶があります。

アメリカには羽田空港からホノルル経由でロス・アンジェルスに飛びましたが、日本の肌寒さとは違ってホノルル、ロス・アンジェルスの暖かさには感動しました。初めて見た憧れの車マスタングやキャデラックのあまりの大きさ、日本ではまだ見たことのなかった猛スピードで車が走っている高速道路、厚さ十cm以上はある新聞紙、風呂場にある洋式の明るいトイレ（日本の便所は薄暗い）、二十四時間オープンのスーパーマーケット、サンタ・モニカビーチで見たビキニ姿のおばあちゃん、肥満の黒人、皮膚、髪の毛、目の色の違った人たちなど驚きの連続でした。

ロスは約一週間の滞在で、その後アメリカ東部オハイオ州に行きました。オハイオ州立ケント大学大学院に入学するためです。オハイオ州の冬は寒く、高知で生まれ育った私には特に厳しかったです。夜中に暖房用の油が切れて家の中がマイナス二〇℃となり、持っていた衣類を全て着込んでもまだ寒かったことや、トイレに氷がはっていたことの記憶がのこっています。オハイオ州には殆ど日本人はいなく、ショッピングセンターを歩いていると小さい子供が、まるで宇宙人でも見るように私を振り返って見ていたことも覚えています。日本食もまったくなかったので、缶入りのヌードル・スープを買ってきて、中国製の醤油とネギを加えて、うどん風にして良く食べたものでした。

三年後大学院を卒業し、日本に帰ろうかとも思いましたが、良く考えてみると英語も大したことはない、アメリカのことも良く解っていない、このまま日本に帰っても全て中途半端で何の意味もないという結論に達し、取り合えずアメリカで働いてみることにしました。

幸い、あの頃の日本は体操が強かったので職はすぐ見つかりました。いきなり、カリフォルニア州のかの有名なスタンフォード大学体操部ヘッドコーチ（監督）としての就任でした。若干二十六歳、英語もろくに話せない、アメリカの文化も良く解らない、監督の経験もない、ないことばかり、あることは体操が上手かった（アメリカでは）というだけの私でした。このスタンフォード大学の偉大さに気づいたのは就職して暫くたってのことでした。スタンフォード大学はサンフランシスコ空港から約五十km南にあり文武両道で有名な私立大学です。学生数は約六千人ですが敷地面積は約八千エーカー、東京都の杉並区とほぼ同面積です。敷地内には牧場、ゴルフコース、消防署、警察署、ショッピングセンター、大学病院、そして六車線のフリーウエイまでが貫いています。スタンフォード大学の卒業生には、HP、YAHOO、NIKE、GOOGLEの創始者たち、現日本駐留アメリカ大使、John Roos、ゴルフのTiger Woods、Michelle Wie、Tom Watson、テニスのJohn McEnroe等、世界的に有名な成功者がたくさんいます。

筆者（中央）とオランダで教えていた子どもたち

アカデミック面に於いては二十七名のノーベル賞受賞者を輩出する一方、スポーツ面では一九九二・一九九六・二〇〇〇年のオリンピック三大会で三十一個の金メダルを獲得するような文武両道を実践している大学なのです。ちなみにこの三大会において、日本の金メダル獲得数は十一個です。同じ金メダルにしても、スタンフォードの選手は文と武を両立させて獲ったものであり、日本選手のスポーツだけやって獲ったメダルとは価値が違ってきます。スタンフォードのメダリストたちは現役引退後、修得した学位を生かし、さまざまな分野で活躍しています。私の教え子には医師、歯科医、弁護士、実業家、政治家、宇宙飛行士、コメディアン、サーカス・パフォーマーなど様々です。日本には昔、文武両道のさむらい文化があったのに、今のスタンフォード大学のような思想を持つ大学がないのは残念です。

三十一年間スタンフォード大学で体操競技を教え、全米学生選手権大会（インカレ）で優勝したり、オリンピックメダリストを輩出したり様々な経験をしてきましたが、優秀な学生、他のスポーツの監督やコーチ、職員たちと接することができたことが私の一番の宝物です。回りには論理的に物事を考え、自分の考え方を率直に示し、他人の意見を尊重し、倫理観の高い人達ばかりでした。日本で次々に起こる政治家、警察官、建築士、医師等による不正や経済界で後を絶たない粉飾決算、偽造・偽装など、日本人の倫理観は私がアメリカに行っていた間にどこかに行ってしまったようです。日本は高度成長期、バブル期を経験し物事に対する価値観が変わったようで懸念を抱いています。

二〇〇七年に私は日本人初の体操競技のコーチとしてアメリカ体操協会の殿堂入りを果たしました。これは多くの体操関係者のサポートがなければ取れない賞であり、日本人の私を推薦し承認してくれた体操関係者、ライバルとして長い間戦ってきた他校の監督たちには大変感謝しています。帰国して間もなく七年となりますが、私の貴重なスタンフォード大学での経験や学んだことを出来るだけ日本で生かしていきたいと考えています。

はまだ　さだお

一九四六年　南国市生まれ
南国市立大篠小学校、香長中学校、高知工業高等学校機械科、日本体育大学、オハイオ州立ケント大学大学院を卒業後、一九七二年よりカリフォルニア州スタンフォード大学体操競技部監督に。ゴルフ部監督等も務め、二〇〇三年に退職。NCAA（全米学生選手権大会）でスタンフォード大学を三度（一九九二年・一九九三年・一九九五年）優勝に導く。全種目優勝も果たし、全米最優秀コーチ賞を三度受賞。一九九二年バルセロナ、一九九六年アトランタ両オリンピックアメリカチームコーチ、アトランタ大会平行棒銀メダリスト「JAIR LYNCH」選手監督。二〇一二年ロンドンオリンピックオランダ男子体操ナショナルチーム監督、同大会鉄棒金メダリスト「EPKE ZONDER LAND」選手監督。二〇〇七年には日本人初のアメリカ体操協会の殿堂入り。今年から、日本体操協会の二〇一六年リオデジャネイロオリンピック男子体操競技・女子体操競技・女子新体操・トランポリンを統括する新設の戦略本部長に就任。著書に『スタンフォード大学で生まれた世界No.1の成功法則』。

全国源流サミット開催報告

野瀬　覚謹

【はじめに】

去る十月十九日から三日間の日程で、県内外から述べ約七百五十名の方々の参加を頂き、「第三回全国源流サミット」が津野町で開催されました。

本サミットは、豊かな自然環境や景観、また伝統文化などを有する源流域の住民の暮らしが、安定的に持続できるよう「参加・連携・協働の源流の郷づくり運動」を推進することを目的に設立された「全国源流の郷協議会」（平成十七年十一月設立）が主催して開催しているものであります。

本協議会には現在、利根川・信濃川・多摩川・木曽川・熊野川・四万十川等の流域自治体、十四町村が加盟しております。

サミットは、「首長サミット」「全体サミット」「エクスカーション」からなっておりますが、「首長サミット」「全体サミット」に関しての報告と致します。

【首長サミットについて】

首長サミットは、構成町村の首長や関係者の他にも、オブザーバーとして馬路村や大豊町、仁淀川町やいの町、梼原町また愛媛県の鬼北町などからも首長や首長代理の方々の出席を頂き開催されました。

会議では、「源流再生に関する政策提言」の協議や、参加自治体の町づくりの現状報告・意見交換、そして次回のサミット開催地の決議等が行われました。

特に、意見交換においては山間地域特有の共通した課題を抱える自治体が多く、予定された時間を大幅にオーバーするなど、内容の濃い首長サミットとなりました。

尚、次回サミットは利根川源流の群馬県みなかみ町に決定致しました。今年七月初旬に開催予定ですので、皆様の参加をお待ちしております。

【全体サミットについて】

二日目の「全体サミット」は津野町B&G海洋センター体育館において、全国から六百名余りの参加を頂き開催されました。

オープニングでは、千百有余年の歴史を有し、国の重要無形民俗文化財に指定されている「津野山古式神楽」が披露され、その勇壮な舞は会場を大いに盛り上げました。

サミットは、開催地である本町の池田町長の歓迎の挨拶で始まり、全国源流の郷協議会会長である山梨県小菅村の舩木村長の主催者挨拶、高知県知事尾﨑正直様のご祝辞等を頂きました。

津野山古式神楽の披露

その後、林野庁長官沼田正俊様による「森林・林業の再生と山村振興の展開」と題した特別講演が行われ、世界の森林の概要や我国の森林・林業の現状、また林野庁が取り組んでいる森林・林業の再生等に関して、プロジェクターによる資料投写を行うなど、幅広く内容の濃い講演となりました。

基調講演では、「川の外科医」として知られ、近自然工法の先駆者である、西日本科学技術研究所（高知市）の福留脩文所長による、「四万十川源流の自然と人の暮らし」が行われました。

今日まで携わってきた、河川や道路の環境整備等の事例報告と併せて、津野町を一つのモデルとして近自然工法の理念を基に、自然景観や環境、暮らしや文化などを生かした、より価値の高い町づくりを行う上での、考え方や手法に関してご教示を頂きました。

近自然の基本理念は「その土地の大気・水・土壌を保全、復元することにより、故郷の景観や暮らしを創出することにある。」とのことであり、その意味でも、近自然の理念は山間地域が抱える課題解決の新たな切り口の一つであると強く感じました。

パネルディスカッションは、「源～人・自然・暮らしとの調和～源流域の新たな可能性を探る」をテーマに、コーディネーターに東京農業大学の宮林茂幸教授、アドバイザーに東京大学の高橋裕名誉教授、またパネラーには樹木環境ネットワーク理事長の渋沢寿一氏や京都府国際京都学センターの井上典子氏など五名のパネリストを迎え、源流域や山林に対するそれぞれの思いが述べられました。

ひ弱と言われる都会の子供達が、源流の楽しさや厳しさを実体験することにより、生きる力や自立する力を養う取り組みを行っている事例報告や、「源流域は他文化との結節点であり、文化や土地利用の多様性がそこにはある。それが源流域の景観の素晴らしさを支える原点であり、文化的価値も高い。」といった意見。

また「国の河川計画は百年に一度の洪水を想定している。気温の上昇などにより、雨の降り方に大きな変化がみられる今日、五十年に一度のリスクを抱えているといっても過言ではなく、その意味では健全な源流（森林）を保全することが、今最も重要である。」などといった、源流域を再評価する意見が出される傍ら、「大都市の人々に地方の源流域の価値や魅力、重要性を発信しようとしても、メディア（新聞・テレビ等）には県境という情報の壁が存在する。」といった現場での悩みや、「山間地域の活性化策として、ヨーロッパでは地域の個性を尊重して、伝統的なものに徹底的にこだわった取り組みを行っている。それを支える仕組みとして、省庁が連携して地域をバックアップする『プラットホーム型』の施策が取られている国も有り、我国でも積極的に参考とすべきだ。」などといった、意見や提案がされました。

これらを踏まえ、コーディネーターの高橋教授からは「都市部には、源流域の苦悩は伝わっていない。伝わったとしても抽象的なものである。ついては、具体的な方法として現状や方向性を示した源流白書を作成してはどうか。」との提言がされ、確認されました。

全国源流サミットの様子

その後、「源流は日本全体の要であり、国土保全、環境保全の最前線に位置している。地球温暖化の防止や、持続可能な社会の構築を重視し、国民とともにその先頭に立って奮闘する。」との四万十川源流からのアピール宣言や、次回開催地の群馬県みなかみ町への大会旗の引き継ぎ等を行い、全体サミットを終了致しました。

【交流会について】

サミット終了後、「津野山郷の大おきゃく」と銘打った交流会が開催されました。

その場で振る舞われた料理は、全て地元婦人会や地域のボランティアによる手料理であり、皿鉢の盛合わせ・猪汁・鮎やアメゴの塩焼き・田楽・ナスのタタキ・鰹のタタキ・各種の山菜料理等々、約二十種類の品々に参加者は舌鼓を打ちました。

また、屋外の特設ステージではオープニングに引き続いて、津野山古式神楽が奉納され、腹に沁みる太鼓のリズムと勇壮な舞に、遠来の方々は時を忘れて見入っておられました。

交流会の最後には、地元のグループによる「四万十川」や「故郷」などのコーラスも披露され、参加者が自然発生的に互いに肩を組合いコーラスに参加するなど、最後まで大いに盛り上がった交流会となりました。

【おわりに】

今回源流サミットを開催するにあたり、どれだけの住民の参加・協力を得ることが出来るのかが、最大の不安要素でありました。

と申しますのも、源流の郷協議会に加盟して日が浅く住民の多くが、「その存在すら知らなかった。」といっても過言ではない状況であったからです。

その様な状況から、住民が主体となった運営委員会を組織することにより、多くの方々にサミットの目的や意義を理解して頂くこととしました。

その結果、多くの住民や団体から理解と協力を得ることができ、中でも交流会に関しては、婦人会が料理から接待まで、全てを一手に引き受けて頂きましたし、猟友会のメンバーは猪汁を、魚族保護会の会員は鮎やアマゴの焼き物を、魚料理の腕自慢は鰹のタタキの実演等々、其々の得意とするところで積極的に参加頂き、交流を深めることが出来ました。

その姿に、訪れた人々からは「サミットも素晴らしかったが、今日の交流会ほど盛り上った交流会は初めてだ、津野町に来て本当に良かった。」との称賛の言葉を頂きました。

また後日、協力を頂いた町民の方々からも、「本当に素晴らしいサミットだった。今回、協力出来たことを嬉しく思う。」との声や「町を誇らしく感じる。」などといった声も聞かれました。

サミットを通じて、自分達の地域の価値を知り、また交流を通じて人を知り、そして互いに協力し合うことにより、地域の輪を創ることのできた三日間となりました。

のせ　あきのり

一九五二年　旧東津野村生まれ
昭和四十七年旧東津野村役場に奉職。産業建設課長・住民福祉課長等を経て、現在、津野町役場企画調整課長。

第十二回「詩のボクシング」全国大会を終えて
みらいホールからのぞむ「声の場」

高瀬　草ノ介

しじまに、心に届く月明かりのような、人を想う言葉がありました。

会場は、浜の夜風に耳をそばだてる落ち着きがあり、さざなみのような、ときに寄せる波のような、笑いがありました。

既成の文学や詩の朗読ではなく、自分自身のオリジナルの言葉を、自らの声で観客の心に届け、胸に響かせる「詩のボクシング」。その全国大会が昨年秋、十月二十七日（土）、神奈川県横浜市の県民共済みらいホールで開催されました。

第十二回「詩のボクシング」個人戦（※①）・全国大会と、第四回「声と言葉のボクシング」団体戦（※②）・全国大会。僕はこの大会に個人戦の高知大会代表として出場しました。

僕が初めて「詩のボクシング」に出場したのは十年前のことです。高知市文化プラザかるぽーとの開館記念事業として行われた第一回高知大会は、出場者全員の言葉が、声に乗って会場に響き渡る喜びに満ちていました。また、観客は、朗読ボクサーと呼ばれる出場者たちの生きた声と言葉に触れ、溜息をついたり歓声を上げたり、まるで波のうねりのように反応していました。

翻って今回の全国大会。会場はかなり落ち着いた雰囲気で、やや大人しい印象でした。ですが、お客さんの一人一人がリングに投げかける視線はとてもまっすぐで、朗読ボクサーの言葉を、その声の奥にある「詩」を、受け取りに来た…そうも感じました。

会場には、大船渡や気仙沼といった被災地から出場した選手がいました。彼等は、とても言葉に真摯に向き合っています。故郷に残る震災の爪痕を、自らの内に残る傷跡を、また大切にしてきた故郷の暮らしを、きちんと見つめて言葉にし、伝えようとしていました。

全国大会での高瀬草ノ介選手（提供元：日本朗読ボクシング協会）

震災以後、被災地に限らず、日本全体が言葉の持つ力を見直そうとしています。言葉によって人と繋がり、言葉によって自分自身を、家族を、大切なものを回復しようとしているように思えるのです。

「詩のボクシング」は当初から、言葉に向き合い、言葉を用いて他者と切り結ぶ…そういう貴重な場であり続けたわけですが、それだけではありません。ここには、まったく掛け値なしの表現の自由があります。

今回の大会でも、各地方から集まった選手たちが、さまざまな内容の詩や散文や言葉を、それぞれの表現方法で朗読しました。

被災地からの苛立ちと憤りの声。三陸鉄道への深い愛着。故郷の特産品を愛情たっぷりにアピールする朗読。携帯端末の発達に伴う人間の変化に警鐘を鳴らす社会風刺詩。パフォーマンスや笑いを織り交ぜながらの強烈な政治批判。言葉遊びでありながら母への応援歌でもある、大爆笑の創作ネタ。愛する人への思慕の深さをきめ細やかに描写した叙情詩。昔話と現代のIT社会を絡めた抱腹絶倒の物語…等々、まったく違ったジャンル、違ったテーマ、さまざまな表現方法が、すべて等価値にリング上に存在しました。

もちろん、トーナメントの性質上、一試合一試合、判定し、勝敗を決めていきますが、そのため、観客は能動的に「聴く」ことになり、リング上で放たれた言葉は結果、勝者・敗者関係なく観客の耳に残り、心に届いている…「詩のボクシング」とは、図らずもそういう作用があるのです。

面白いのは、朗読を聴いていても、朗読していても、情景が見えることがあることです。今回の大会でも、朗読中何度か、目の前に情景が広がる瞬間がありました。ひょっとしたらその瞬間、会場のお客さんと同じ情景を見、同じ空間を共有していたといえるでしょうか。

高知チャンピオンに輝いた高瀬草ノ介選手

今回、個人戦も団体戦も（出場者としても観客としても）、たくさんの自由な声と言葉を共有し、味わい、楽しむことができました。

さて、「詩のボクシング」は、全国大会のために地方があるのではないといいます。それぞれの地方で、地元の住民が自由に参加でき、その土地の人が耳を傾ける…アマチュア参加の地方大会の意義はそこにあるのでしょう。

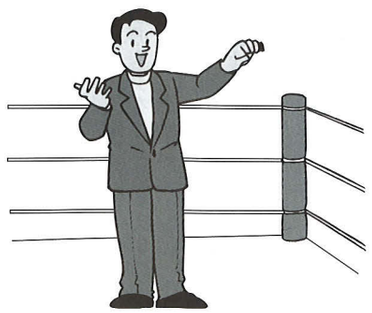
今回の出場者の中に地方大会の実行委員長を務めている方がいました。彼女たちは仕事や育児、家庭での役割をこなしながら選手として作品を作り、楽しませる努力をしてきたのですが、数年前から実行委員としての役目も負っているのです。

オープンな状態で、誰でも応募でき、気軽に表現者として自分を磨く機会を与えられ、他者の声に耳を傾けることができる…地方にとっての、この貴重な場を存続させることが、現在は、ごく少数の主婦たちの小さな肩にかかっています。

「詩のボクシング」と「声と言葉のボクシング」が、まだ参加したことのない人のためにも、まだ観たことのない人のためにも、より良い状態で続けられることを切に望みます。

※①　リング上で赤青コーナーに分かれ、一対一で朗読しトーナメント戦を行う。

※②　三人一組、三分以内で朗読。



たかせ　くさのすけ
一九六四年　高知市生まれ
二〇〇二年第一回「詩のボクシング」高知大会に出場。以来、十年連続出場。高知大会での優勝四回。

言葉の現場から 37

国語の授業は難しい！

広井　護

国語の授業は難しい。教師にとって難しいのである。

毎年母校に帰ってくる教育実習生たちを見ていると、それがよくわかる。授業で一番苦しんでいるのは国語の実習生である。

むろんどの教科の実習生も授業づくりには悩んでいる。授業時間いっぱい生徒たちを引きつけ集中させるだけでも容易なことではない。その上教科内容を理解させ定着させるとなれば難事業である。

ところが国語の実習生たちは、それ以前の問題でつまずいている。「一体何を教えればよいのだろう。…」という悩みである。

他教科なら、数学の「三角関数」、英語の「関係代名詞」、日本史の「大化の改新」…というように教える内容が明確に与えられている。それをどうわかりやすく教えるかということが問題なのだ。

ところが、国語はそれ以前に大問題がある。たとえば中学国語の教科書に、次のような俳句が載せられている。

> 引つぱれる糸まつすぐや甲虫（かぶとむし）　高野素十

「この俳句で一時間の授業をしなさい。」と言われたら、気の弱い実習生なら泣き出すかもしれない。読めばわかるように書かれている作品である。この句で一体何を教えればよいのだろう。またその指導によってどういう国語の力をつけることができるのだろう。

私が教師になって以来今日まで悩み続けている問題も、実はこれなのである。経験と年の功で、何とか授業時間を埋めることはできるようになったが、今も心の底に同じ問いが響いている。読めばわかるように書かれた日本語の文章で、何を教えることができるのか…という疑問である。授業づくりに苦しんでいる実習生の姿を見るたびに、自分の原点が想起される。

以下は、私の授業遍歴の一例、尾崎放哉（ほうさい）の一句をめぐる試行錯誤の記録である。

教師になった二年目の秋、教科書中で次の句に出会った。

> 咳をしても一人　尾崎放哉

強烈な印象を受けた。この句についてはきちんと授業をしたいと思った。

実はその時まで私は教科書中の作品をスルーし、授業中の雑談に精魂を傾けていた。前記の国語の実習生と同じ問題につまずいていたからだ。幸い読書量には自信があったので教材に関連した雑学を次々に開陳することで授業時間を埋めていた。

たとえば、『ことばの力』（大岡信）という随筆を教えるときは、以下のような雑談から授業を始める。

ウィリアム・シャイラー著『第三帝国の興亡』という長い本がある。その中にこんなエピソードが紹介されている。

アドルフ・ヒットラーは、本当は「ヒットラー」という名前ではなかった。「ヒートラー」というのが本名である。ところが若いころに、どういうわけか「ヒットラー」と改名した。

もしヒットラーが改名せず「ヒートラー」のままだったなら、名高い「ハイル・ヒットラー」というナチス式敬礼は、「ハイル・ヒートラー」というまことに間の抜けた響きになっていただろう。とすれば、ヒットラーがあれほどまでに群衆を熱狂させ、その支持によって独裁者となるということはなかったかもしれない。…と書かれていた。

「ッ」と「ー」というたった一文字の違いが歴史を変えたかもしれない。「ことばの力」の大きさに、そのとき私は深甚（しんじん）なる衝撃を受けた。…というような話である。

それから随筆『ことばの力』を朗読し、難語句等を説明する。あとはチャイムが鳴るまで同タイプの雑談を語りぬき、「ことばの力」というキイワードでしめくくる。

雑談のネタを仕入れるために徹夜で読書にふけったこともある。授業の中に、生徒の興味を引く雑談を入れることは、想像したよりはるかに難しい技術を要し、猛勉強が必要だった。だが、雑談でどんなにうまく時間を埋めても、作品から逃げているという後めたさをまぬがれることはできなかった。

ところが、尾崎放哉の「咳をしても…」の句には、雑談ではごまかすことができない存在感があった。こちらの魂を深くゆさぶる何かが感じられた。しかしその「何か」をどうとらえ、どう教えればよいかがわからない。

苦しまぎれに、生徒に感想を言わせ、それによって授業を成立させようとしたこともある。（Tは私。Pは生徒である。）

T「この句を読んで感じたことを、どんなことでもいいから言って下さい。…どんなことでもいいよ。」

P「淋しそう。…」

それで、終わりだった。生徒の言葉にいくらかのコメントを加えてみたが、二分弱（！）で授業は終わった。複数の教室で同じ試みをしたが結果は同じだった。どの教室でも二分以上授業は成り立たなかった。

このときの敗北感は大きかった。

雑談でごまかしているうちは何とかなっても、正面から国語の授業をしようとすると、正味二分しかもたないーーという事実に打ちのめされたのである。

そのころ、友人に相談したことがある。友人は別の学校で国語教師をしていた。

「国語って一体何を教える教科なんだろう。」と、ストレート過ぎる質問をぶつけてみた。すると驚くべき答えが返ってきた。

「お前は傲慢なんだよ。文学を教室で教えるつもりなのか。詩人も作家も天才だ。その作品を一介の教師が教室で教えるなんて思い上がりだ。そもそも国語教師が授業で教えることができるものは二つしかないんだ。」

何だろうと思った。

「一つは漢字だ。」

と、友人は宣言した。

「もう一つは語句だ。」

私はあっけにとられた。

「この二つを丁寧に指導したら、それで終わりだ。教師の考えを押しつけるんじゃなくて、解釈は生徒に任せればいい。感想を書かせるのもいい。発言できない生徒も、短い感想ならけっこう書く。その感想を読み上げながら『こういう考えもあるね。』『あっ、こういう読み方もあるんだね。』というコメントを加えたらいい。一時間ぐらいすぐたつよ。」

この明快な言葉は、一瞬私を打ちのめした。国語の授業について悩むこと自体が無意味だと宣告されたように感じたからだ。頭から冷水を浴びせられた気分だった。…ところがその気分の底から、なんとも言えない解放感も湧いてきた。

そうか。そうだったのか。国語の授業は意外に簡単なのかもしれない。…と思ったのである。

しばらくの間、友人のアドバイスに従って授業をしてみた。すると友人も、実は私同様の状態だったーーつまり授業から逃げていたのだということがわかった。漢字と語句の授業では、生徒の納得は得られない。感想を書かせて全部肯定していると「結局何を言っても同じじゃないか。…」という、ゆるんだ雰囲気が広がり、教室はしらけてゆく。

結局自分で工夫するしかない、と思い知らされたことだった。

その後（のち）私が、試行錯誤の果てにたどり着いたのが、「作家の人生から作品に迫る」という授業方法だった。

例えば尾崎放哉は、数奇な人生をおくった俳人だ。東京帝国大学の法学部を卒業した秀才で、大きな保険会社の要職についていた。ところが一切を捨てて放浪生活に入る。今で言えば、超エリートサラリーマンがホームレスになったようなものだ。劇的な人生である。

この人生を、まるで見てきたように語る。そしてクライマックスで「咳をしても一人」を静かに朗読する。

T「このとき放哉は結核にかかって死を意識していた。この句は孤独の極北を表している。…」

というふうに授業をしめくくる。

この方式には良い手応えを感じた。生徒たちも授業を聞いてくれたし、私も国語の授業をしている気分を味わうことができた。

そのため、実に十数年もの間私はこの方法に固執することになる。

ところがあるとき、授業後の教室で一人の生徒からこう言われた。

「作家のことをそこまで知らんといかんですか？ 先生は本読むとき、作者の人生知って読んでるわけ？」

これはこたえた。

作者の人生を知らなければ、その作品が読み解けないのだとしたら、大学入試や高校入試に出題される文学作品は読解できないことになる。授業で教えられる作家の数には限りがあるが、入試に出題される作家の数は無数だからだ。

そう思ったとき、国語の授業を成立させるためには、作品自体と向き合わざるを得ない——それしかないのだということを、ようやく悟ったのである。すると尾崎放哉の「咳をしても一人」が、全く別の角度から見えてきた。次回はそのときの授業を紹介したい。

ともあれ、国語の授業は難しいのである。

ひろい　まもる
一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

10月～12月の事業から

高知市文化プラザかるぽーと開館十周年記念事業

第六回高知市民ミュージカル「音の旅人」

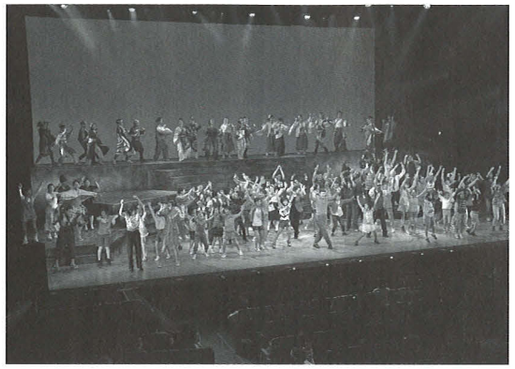
十月二十日・二十一日かるぽーと大ホールにおいて、第六回高知市民ミュージカル「音の旅人」を上演しました。

この作品は、二〇〇八年に上演された作品の再演で、高知の文化財産として今に繋がる「よさこい祭り」の基礎を創り上げた武政英策氏の生涯を通じて、現代に生きる我々が引き継ぐべき「自由に音楽を愛する心」を表現しました。

出演は五月に開催されたオーディションを経て結成された、高知県内に住む六十七名の皆さんによる劇団「音の旅人」に、よさこいダンサーズ五十九名を加えた合計百二十六名によるステージとなりました。

再演にあたって台本や楽曲の変更は行わず、あくまで演出の力で作品を深化させることを目的とした熱心な指導によりできあがった舞台は、前回の初演を観劇された方からも大きな賞賛の声をいただきました。

〈三回公演入場者数・合計二千四百六十七名〉。



高知市文化プラザかるぽーと開館十周年記念事業

ペギー葉山歌手生活六十周年記念コンサート

かるぽーと開館十周年と、名誉高知県人であるペギー葉山さんの歌手生活六十周年を記念するコンサートを十一月四日（日）、かるぽーと大ホールで開催しました。「南国土佐を後にして」の歌碑建立と相俟って、大盛況のコンサートとなりました。

メドレーを含めた全十九曲、ジャズからミュージカルナンバー、シャンソン、ポピュラーソングから「南国土佐を後にして」まで、ペギーさんは年齢を感じさせない素晴らしい歌声を披露してくれました。

また、地元の高知少年少女合唱団・高知学芸中学高等学校コーラス部の皆さんにも歌っていただき、ペギーさんとの共演「サウンド・オブ・ミュージック・メドレー」や、上町よさこい鳴子連に登場していただいたよさこい鳴子踊りも大好評でした。

ほぼ満席のお客様からは「素敵な歌声に心洗われる思いでした」「同年代で、元気をもらいました」「地元合唱団との共演等、ペギーさんを身近に感じました」「感激しました。またペギーさんのコンサートに期待します」などの声が寄せられました。

〈入場者数・九百四十名〉。

高知市文化振興事業団

ワールドミュージックナイト Vol・11

十一月二十五日（日）、かるぽーとガレリアにおいて、ワールドミュージックナイトvol・11を開催しました。

この公演は市民組織「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」と協働で開催しているコンサートシリーズで、世界の音楽と食べ物を一度に楽しめるというコンセプトで行っています。

今回はアメリカのルーツ・ミュージックをテーマに、日本が誇るブルーグラスバンド「ブルーグラス45」をメインアクトに、地元高知からは「ロンギング・フォー・ザ・サウスランド」「アメリカンドッグ」の二組が出演しました。

会場にはブルーグラス、フォーク、ブルースと、古き良きアメリカの音楽が溢れ、来場された皆さんは開放的な空間の中、自由に音楽を楽しんでいました。

〈入場者数・百十名〉。

美術中級講座

日本画スキルアップカリキュラム

制作経験者の更なる技術向上を目的に、十二月一日・二日の二日間に渡って行われました。講師に高知大学教育学部の野角孝一先生と研究生お二人を迎え「箔を用いた揉み紙の制作」をご指導頂きました。

揉み紙とはその名の通り和紙を揉んで皺を施す表現技法の一つ。それに箔を貼ることで豪華で煌びやかな印象が生まれます。工夫次第で表情の演出は無限大。揉み紙も箔の扱いも初めてという方が多く、貴重な経験となったようです。

完成した個性豊かな揉み紙に下絵を描き、色付けへと作業は進みます。受講生の質問一つ一つ丁寧に答えられる先生方。少しでも多くの知識を持って帰って、今後の制作に繋げて欲しいという思いが伝わります。今まで自分達では思いつかなかった配色や筆使いのアドバイスに受講生達も熱心に聞き入っていました。

最後の講評では受講生が自分の作品に対する考えや反省点を述べたうえでお互いに感想を述べ合いました。異なった視点での意見交換は良い刺激となったようです。

短い時間でしたが、濃密で充実した時間を過ごすことができたようで、「来年も是非！」との言葉を多くの受講生から頂きました。

〈受講者数・六名〉。

高知を撮る

第28回写真コンテスト入賞作品

キラキラ星人

（平成24年1月　高知県民体育館前・電車内）

石川　賢一

成人式の式典が終わると友達同士で会場前から路面電車で移動です。今日の彼女たちは眩しいほどキラキラ・キラキラ輝いて見えます。

公立の学校と私立の学校

風俗歳時記

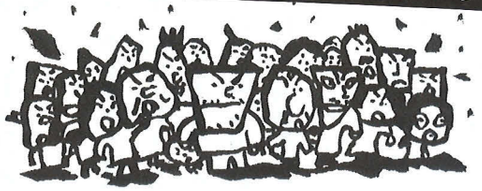
子どもの頃、「都会のネズミと田舎のネズミ」というイソップの寓話を読んで共感した。都会生活をうらやましく思う田舎のネズミが都会に行ってみたが、人に怯えずに安心して暮らせる田舎の生活がやっぱりいいというお話。先日、ママ友の会話の中で…

方や、わが子を公立高校に通わせ今春に受験を控えている高校三年生の母親。もう一方は、私立の中高一貫校に通わせている同じく受験生の母親。公立の高校三年生の母親は言いました。「旧帝大に行きたいという子どもに、これまでの子育てのやり方を毎日とがめられる。どうしてもっと勉強のできる環境に置いてくれなかった？小六の時、みんなが塾に行っているのに、自分はゲーセン（ゲームセンター）通い。公立中学校では、勉強してたら変り者扱い。高校まで勉強する習慣も身につけられなかったのに、三年間で合格しろなんて無理！　親なら、高知の教育状況を把握しとけって。やっぱり中学受験させておいたらよかった」と、ひたすら嘆いていた。私立の中高一貫校は、それぞれに学力が似通った生徒が入学しているので、授業は総体的に落ち着いて、同じ学力レベルで進められる。確かに偏差値の高い大学を目指す生徒の数も多い。一人黙々と受験勉強するより、仲間といっしょに目標に向かった方が楽しいだろう。

県内の公立中学校の学力は、全国でも最下位レベルにあるが、行政は立て直しに必死に取り組んでいるし、県立高校の進学実績もこのところ目を見張るものがある。公立に小学校から一貫して通わせ、旧帝大を目指すまでに育てたその母親は、今の時点で既に立派だと思う。私立には、高額な授業料や人事異動のない先生との相性など、公立にはない問題もある。実際に私立に通わせると、「公立の方がよかった」と思うこともあるかも知れない。「都会のネズミと田舎のネズミ」。案外、自分のおかれた環境の良さには気づかないものだ。

（立花香）

南河内万歳一座 × 高知演劇ネットワーク演会



関西小劇場界屈指の劇団、南河内万歳一座によるパワフルな演劇公演と、
高知で活動する演劇団体の選抜メンバーによる合同公演の豪華2本立て！

高知演劇ネットワーク演会合同公演
内藤裕敬 作・演出「雨かしら」
日時：2月10日(日)①14:00 ②19:00開演／2月11日(月・祝)14:00開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと小ホール
料金：全席自由　前売り2,000円　当日2,500円

南河内万歳一座「お馬鹿屋敷」
日時：2月16日(土)14:00開演／2月17日(日)14:00開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと小ホール
料金：全席自由　前売り3,000円　当日3,500円

※2公演共通チケットは4,000円で販売します（要予約）

お問い合わせ：高知市文化振興事業団　088-883-5071

第８回美術作品コンクール

CONCOURS des Tableaux 応募作品展

高知市文化振興事業団は、若手の美術作家を支援・育成することを目的に第８回美術作品コンクールを開催します。
最終日には、森美術館チーフキュレーターの片岡真実氏による作品講評・公開審査が行われます。
若手作家のエネルギーあふれる作品をぜひご鑑賞ください。

平成25年
1月22日(火)～27日(日)
10:00～17:00
公開審査・講評　27日(日)14:00～
高知市文化プラザかるぽーと
７階市民ギャラリー
第１・２展示室　入場無料

【お問い合せ】
高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

今号の表紙

「春の七草粥」

黒岩　亜美

春の七草は一月七日の朝七種の野菜が入ったお粥を食べる風習です。
弱った胃を休めるだけでなく一年の無病息災の願いも込められています。

（くろいわ　あみ／
国際デザイン・ビューティカレッジ１年生）

風伯

不正と過失

つい先だって、神奈川県から来られたある会社の代表権のある高知出身のオーナー会長のY氏に逢う機会があった。長い間第一線で働いて、いまは隠居に近い身のようだが、私などの田舎にはない、落ち着きと品格があった。豊かさ故の心の余裕かも知れないとも思った。
最近、でもないかも知れないが、政治家やビジネスの世界で不正やら失態が明るみに出る機会が多い。権力を利用した利益誘導や、会社での地位を利用した横暴や不正。会社ぐるみのごまかしなど、人間の品性に関わる部分が欠けているのではないかと思えることが多い。
少なくとも日本には、こんなに利益や金銭をあからさまに求めるような精神は、浅ましいこと、恥ずかしいこととされる文化があったように思うが、「儲けて何が悪い」というような居直りが目につく。何も悪いとはいわないが、そうした精神には品性が欠けてしまう。人間としての魅力に欠けるように思えてならない。
不正が明るみに出て、「二度と起こらないように身を引き締めて」などと釈明しているのも、それは違うだろうといつも思う。過失ならそういえるのかも知れないが、不正は自ら承知していて行う行為だからだ。二度、三度ならず繰り返すのではないか、と思えるのは当然だろう。いま女性が男を評価するのはまず収入で「品性」などはどこにも見あたらない。その辺りから、世の男性の指向が変わってきたのではないかと勘ぐってしまう。功なり名を遂げても、なお品位を保つことの難しさを思うと、先日お逢いしたY氏は、奇跡なのかも知れないと思った。

（霖）

文化高知 No.171 2013年(平成25年) 1月1日発行 [隔月発行]

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

第23回 高知出版学術賞 推薦募集

優れた学術研究の振興は、文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。「高知出版学術賞」は、当該年における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的としています。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】
次の事項をみたすもの。
1) 高知県内に在住する者の学術的著述、または、県外在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
2) 2012年（平成24年）1月1日から12月31日まで（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】
自薦・他薦を問いません。
必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書3部を添えて審査委員会へ提出して下さい。
（図書は、申し出により審査後に2部まで返却します。）
受付締切　1月31日（木）

【表彰】
3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を送ります。
要綱・推薦書をご希望の方にはお送りします。

【推薦・お問い合わせ】
高知市文化振興事業団 内
高知出版学術賞審査委員会　〒780-8529 高知市九反田2-1
電話 088-883-5071　e-mail　kikaku@kfca.jp

第28回 「記録写真部門」 平成の部 準特選
屋根の変身 河野彰子

第29回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

どなたでも、一人何点でも応募できます。**出品料無料**

過去から現在に至る高知県内の出来事や風景、人々のくらしを記録し、郷土の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただきます。

応募締切
1月31日(木)
発表　3月上旬

テーマ

●記録写真部門
記録性を持った高知県に関する写真
①平成の部（平成時代に撮影されたもの）
②昭和以前の部（昭和以前に撮影されたもの）

●I LOVE 高知部門
好きな高知の風景・風俗等を表現した写真
（1年以内に撮影）

応募先
○高知市内各カメラ店
○高知市文化振興事業団　写真コンテスト係
（月曜休館。祝日の場合は開館）
〒780-8529 高知市九反田2-1
電話 088-883-5071

賞
特選　2点（賞状・賞金3万円）
準特選　10点以内（賞状・賞金1万円）
（各部門とも）

入選作品展
平成25年3月19日（火）～24日（日）
高知市文化プラザ 市民ギャラリー 第4展示室

●カラー・モノクロともにワイド四ツ切サイズ（254mm×365mm）以上
●組写真は3枚までで、写真の順番と組写真であることを明記して下さい。
●両部門ともパネル貼りは不要です。
詳しい応募要領は高知市文化振興事業団までお問い合わせ下さい。

第28回 「記録写真部門」 昭和以前の部
準特選
昭和のヨサコイ 横山正富